

【翻 訳】

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第九章～第十章\*

堀 智 弘

第九章 作者の個人的待遇

ルクリーシアさんゝその優しさゝそれがいかに表れていたかゝ  
「アイク」ゝ彼との戦いゝその帰結ゝルクリーシアさんの軟膏ゝ  
パンゝいかにそれを入手したかゝ暗闇に射す陽光ゝ寒さに苦しむ  
ゝいかに食事をとっていたかゝボルチモア行きに備えよとの命令  
ゝ農園を出ることを思ってた喜びするゝ過度な垢落としゝいとこ  
のトム・ボルチモアの話ゝそこに到着ゝソフィア・オールド夫人  
の心温まる歓迎ゝトミーちゃんゝ新たな仕事ゝ新たな責務ゝ人生  
における転換点

ロイド大佐の農園で、主人の家にいた期間にわたし個人が経験

\* 本稿はJSPS科研費JP21K00384による研究成果の一部である。

したかぎりでは、語るべき残酷なあるいは衝撃的な出来事はない。そのたぐいで挙げることはできるのは、ケイティおばさんから時おり殴られること、不注意でいたずら好きな少年が父親から受けるような定期的な鞭打ちを主人から受けていたことくらいである。わたしは田畑で働ける年齢ではなく、畑仕事以外にはやるべきことはほとんどないため、自由な時間はかなりあった。わたしがやらなくてはならないことといえば、せいぜい、夕方に牛を追いつめること、前庭をきれいにすること、主人の若い奥さんであるルクリーシア・オールドのためにちよつとしたお遣いをするものであった<sup>1</sup>。わたしには、この女性がわたしに対して好意をもってくれていると考えるいくつかの理由があったので、頻繁に彼女の関心の対象になることはなかったとはいえ、彼女を自分の

<sup>1</sup> ルクリーシアは一八〇四年十二月生まれなので、ダグラスがボルチモアに送られた一八二六年にはまだ二十二歳にもなっていなかった。

友人だと思つていて、彼女のためににかをする特権が与えられれば、いつでもうれしかった。厳しく冷酷で無関心なことの多い家庭においては、ほんの少しでも示される親切な言葉や様子は、わたしにとって満額の価値があった。ミス・ルクリースシアは——わたしたちは彼女が結婚したあともずっとそう呼んでいた——わたしのことを愛していなかったとしても、かわいそうだと思つてくれているのがわかるような言葉と様子をさしのべてくれた。言葉や様子にくわえて、彼女はときどき一切れのパンとバターをくれたが、それは食料品の明細書には記されておらず、ただ彼女がわたしに対して抱いていた優しい配慮と友情から、ケイティおばさんや主人の与り知らぬところで特別に確保してくれた食べ物にちがひなかった。それからある日、わたしはエイベルおじの息子の「アイク」とけんかして、ひどく痛めつけられた——実のところこの悪童は、溶けた鉄で固まった尖った燃えさしを鍛冶屋の炉からとつてきて、わたしの額をごつんと殴ったので、そのときできた十字型の傷はいまでもはつきりと残っている。傷からはかなりひどく出血して、わたしは大声でうめきながら家に戻った。心の冷たいケイティおばさんはわたしの傷にもうめき声にも関心を示さず、自業自得だ、アイクなんてほっとけ、いいさまだよ、あたしゃ「ロイドの黒んぼたち」には関わらないよと言うだけであった。こういう状況でルクリースシアさんがやつてきて、ケイティおばさんがみせたのとはまったく異なった様子で、応接間にわたしを呼び入れて（これ自体が特別な扱いであつた）、台所でわたしを痛めつけるこの人物が使う無情で非難がましい言葉を一切口にせずに、よきサマリア人を静かに演じたので

あつた。彼女はその柔らかい手でわたしの頭と顔から血を洗い、自分のバルサム2の瓶をもつてきて、上質な白い亜麻布の生地をバルサムで湿らせて、わたしの頭に巻いてくれた。彼女の優しさは、バルサムが頭の傷を治してくれる以上に、ケイティおばさんの冷淡な言葉によつてできた心の傷を癒してくれた。これ以降、ルクリースシアさんはわたしの友であつた。わたしはそうに感じたのであり、頭に布を巻くという簡単な行為は、彼女の心にわたしの生活への関心を呼び覚ます上で大きな役割を果たしたことは疑いない。そうした関心は決して目立ったものではなく、わたしが腹をすかせているときにパンを一切れくれるという以上にめつたに発露することはなかったというのは確かであるが、奴隷農園ではそれはたいへんな恩恵であり、子供たちのなかにあつて、わたしはそのような関心を払ってもらえた唯一の者であつた。わたしはとても空腹なとき、裏庭に入つていつて、ルクリースシアさんの窓の下で遊んだものである。空腹にひどく苦しんでいるときには歌うのが習慣であつた。というのも、この善良な婦人はすぐさま、それは一切れのパンを乞うているのだと理解してくれたからである。ルクリースシアさんの窓の下で歌えば、報酬を十分にもらえる見込みがかなりあつた。わたしにはふたりの友人がいて、そのどちらも重要な場所にあつた——大屋敷にはダニエルさまが、家にはルクリースシアさんが——ことを読者は了解するであらう。ダニエルさまからは年長の少年たちからの保護を、ルクリースシアさんからは、わたしが空腹のときは歌うことでパンを、

2 バルサムはある種の樹木の樹液から作られる軟膏。香りが強く、傷を直したり、痛みを和らげるために使われる。

あの口やかましい女から虐待されたときには同情をもらうことができた。このような友情に対して、わたしは深い感謝を感じていたのであり、奴隷制の記憶は苦々しいとはいえ、優しさが示された事例であればどんなものでも、わが隷属の家の鉄格子をとおしてわたしの魂にまで差し込んできた人情あふれた扱いの陽光であればどんなものでも好んで思い出している。そのような陽光は、それが貫く全体的な暗闇の分だけますます輝かしいようにみえ、それがもたらす印象は鮮やかにはっきりとして美しいのである。

前にちよつと述べたように、わたしは老主人からめつたに鞭打たれることはなかったし、ひどい鞭打ちを受けたことは一度もなかった。空腹と寒さをのぞけば、苦痛に感じるような扱いを受けたこともほとんどなかった。空腹と寒さは、わたしが抱えるふたつの大きな肉体的な苦難であった。十分な食べ物も衣服も得られなかったが、空腹よりも寒さに苦しんだ。夏の酷暑にあらうと、冬の極寒にあらうと、ほぼ裸の状態のままにさせられていたのである。靴も靴下も上着もズボンもなく、あるのは、膝まで届くある種のシャツに仕立てられた粗い袋地あるいは麻くず地だけであった。わたしはこれを昼夜着ていて、一週間に一度着替えるのだった。昼のあいだは家の陽の当たる側にいて、悪天候のときには台所の煙突の角にいて、自分の身をほぼ問題なく守ることができた。最大の困難は、夜間に暖かくしていられるかであった。豚小屋の豚には葉っぱが、馬小屋の馬には藁があったが、子供たちにはベッドがなかったのである。子供たちは広々とした台所のあらゆるところに身を寄せていた。わたしはたいい小さな物置で、くるまる毛布さえなく寝ていた。寒さがひどいときに

は、いつもトウモロコシを粉挽きまで運ぶための袋を取り出してきて、そこに入ることもあった。そのなかで寝れば、頭隠して足隠さずでも、眠り心地はよくないとはいえ、部分的に身は守られた。わたしの足は寒さであまりにあかぎれがひどく、その傷口には、いまこれを書いているペンを置くことができるかもしれないほどである。わたしたちが老主人の家で食事をする仕方には、文明的な洗練がほとんどみられなかった。わたしたちのトウモロコシ粥は、十分に冷まされたあと、ここ北部でメープル・シロップを作るのに使われるような大きな木盆もしくは飼い葉桶に盛られた。この盆が台所の床か屋外の地面の上に置かれ、子供たちが豚の大群と同様に呼ばれると、豚の大群と同様に子供たちはやってきて、粥を文字どおり貪るのだった——牡蠣の殻を使うものもいれば、屋根板の切れ端を使うものもいるが、スプーンを使うものは皆無であった。最も早く食べる者が最も多く食べ、最も力の強い者が最もよい場所を得ていたが、十分に満足して盆を離れる者はほとんどいなかった。わたしは、ケイティおばさんからあまりよい感情を抱かれていなかったため、なかでも最も恵まれない者であった。わたしがほかの子供を押しのけたり、ほかの子供がわたしに関してなにかよろしくないことを彼女に言いつけたりすると、彼女は最も悪い意味に解釈し、かならずわたしを鞭打つのであった。

成長して、分別もつくようになるにつれて、わたしは自分の惨めさをますます実感するようになった。ケイティおばさんの無慈悲さ、わたしを苦しめる空腹と寒さ、耳に届く悪と非道の恐ろしい噂、加えてわたしがほぼ毎日目撃していることは、まだ八歳か

九歳ではあったが、わたしに、自分が生まれてこなければよかったという願望を抱かせるに至った。かつてわたしは、自分の状況をハゴロモガラスと対比させていた。その野生味あり甘美な歌を聴いて、この鳥を非常に幸福だと空想したので――鳥たちの陽気な様子はわたしの悲しみの影を深めるだけであった。子供たちには生きていくなかで考えにふける日々があり――少なくともわたしの場合にはあった――そうしたとき彼らは、知の対象となるあらゆる重要で根本的な主題と格闘し、一瞬のうちに、その後の経験によっても揺るがされることのない結論に到達するのである。わたしは九歳にして、奴隷制の不当で不自然で残忍な性質について、いまとまさに同じくらい気づいていた。書籍にも法律にもどんな権威にも訴えかけることなく、神を父だと受け入れれば、奴隷制を犯罪とみなすのに十分であった。

わたしがロイド大佐の農園を離れてボルチモアに行ったのは十歳にもならないときであった<sup>3</sup>。この農園を去ることは、表現できないほどの喜びであった。老主人が、その義理の息子であるトマス・オールド氏の兄弟にあたるヒュー・オールド氏と一緒に暮らすように、わたしをボルチモアに遣うことにしたとの知らせを、わが友人であるルクリーシアさんから聞いたときの歓喜をわたしは絶対に忘れないであろう<sup>4</sup>。わたしがこの情報を受け取ったのは出発の三日ほど前であった。その三日間はわが幼年時代でも最高に幸福な日々であった。わたしは三日間の大部分を川で農園の垢を落とし、新しい家に向かう準備をして過ごした。ルク

3 ダグラスがボルチモアに送られたのは、一八二六年の三月、彼が八歳のときである。

リーシア夫人はいかにも生き生きと、わたしの準備に心を配ってくれた。彼女は、ボルチモアに行く前には足と膝から垢をすべて落としておかなくちゃだめよ、あそこの人たちはとっても清潔で、もしあなたが汚い様子だったら笑われちゃうわよとわたしに言った。それに、あなたにズボンを一着あげるつもりだから、泥をぜんぶ落とさないと履けないでしょと。ズボンを一着自分のものにできるという考えは確かに魅力的だったので、この警告は無視するわけにかなかった。それだけでも、わたしが（豚追いたちが言うように）疥癬かすだけでなく、皮膚までもこすり落としたい気分させるのにほぼ十分な動機であった。そのため、わたしは本当に真剣に作業に取り掛かったのであり、はじめて報酬を期待して働いた。わたしは非常に興奮していて、取り残されやしまいかと心配で、ほとんど眠ろうとさえしなかった。通常であれば子供を家庭へと結びつける絆はすべて切り離されてしまっていたか、わたしの場合だと、少なくともロイド大佐の本拠農園に関するかぎりでは、そうした絆はそもそも存在していなかった。なので、いざ出発となっても、タッカホーの家を離れるときに経験したような過酷な試練はなかった。老主人の家にはわたしの心を引き留めるものはなく、わたしにとっては我が家というより牢獄であった。そこを離れる際にも、そこに居続けることで享受で

4 トマス・オールド（一七九五―一八八〇）は造船技師としてロイド大佐のスloop船『サリー・ロイド号』の建造を監督し、のちにこの船の船長となった。一八二三年にアーロン・アンソニーの家に寄宿していた際に、その娘ルクリーシアと出会って結婚した。ほどなく幼いダグラスを含む十一名の奴隷をアンソニーから相続し、一八二六年にボルチモアに住んでいた弟ヒュー（一七九九―一八六一）にダグラスを貸し出した。



きたかもしれないなにかを残していくとは感じる事ができなかった。母親は**ずいぶん**昔に亡くなっていたし、祖母は遠く離れていて、めったに会うこともできなかった。ケイティおばさんは情け容赦なくわたしを苦しめる人物にすぎず、二人の姉たちと兄弟たちとは早くに引き離されてしまい、奴隷制の家族を破壊する力によって、わたしにとって比較的他人であった。わたしたちが親族であるという事実は、ほとんど消し去られてしまっていたのだ。わたしは我が家をほかの場所に探し求めている、いま立ち去ろうとしている場所以上に楽しみとは無縁の場所はないことを確信していた。しかし、もし新しい我が家に——非常に至福の期待をもってそこに向かおうとしているのだが——苦難や鞭打ちや裸同然の状態があるのだとしても、ケイティおばさんの管理下に留まっていたら、そうした悪のどれひとつからも逃れることはな**い**にちがいないという不確かな慰めを見出していた。それに、ロイド大佐の農園でこの種の苦難をたくさん耐え忍んできたのだから、ほかのどこでだろうと、特にボルチモアであれば、同じくらい耐えることができると思っていた。というのも、「イギリスで絞首刑にされるほうが、アイルランドで自然死するよりまし」という諺に表現されている感覚を、わたしはこの都市にいくぶんか感じていたからだ。ボルチモアを見てみたいという強烈な願望をもっていたのだ。いとこのトム——わたしより二、三歳年上の少年——がそこに行ったことがあり、話し方は流暢ではなかったが（彼はかなりのどもりであった）、彼がこの場所について饒舌に語るのに感化されて、わたしはそういう願望を抱くようになった。トムはオールド船長のボーイをつとめることがあり、ボルチモア

から戻ってくると、少なくともこの出張が忘れられるまでは、わたしたちのあいだではある種の英雄であった。彼に特筆すべきところがあるわけではなかったし、特に見事なところや力強いところを指し示すこともできなかったが、ただ彼はそうしたことにはるかに勝るものをボルチモアで見えたのだ。大屋敷でさえ、その内部の絵画と外部の柱すべてをあわせても、「ボルチモアに比べたらたいしたことない」と彼は大胆にも言うのであった。トランプット（値段六ペンス）を買って農園に持ち帰り、店々の陳列窓に見たものを語った。爆竹の音を聞いたし、兵士たちを見だし、蒸気船も見ただ、ボルチモアには『サリー・ロイド号』のようなスループ船を四艘も運べるような船が何艘もあったぞと話すのだった。市場の建物についておおいに語り、鳴り響く鐘について話し、それ以外にもわたしの好奇心を掻き立てるようなことを多く述べた。そして、そうした話は新たな我が家での幸福へのわたしの希望を確かに強めたのだった。

わたしたちがボルチモアへ向けてマイルズ河を船で出立したのは、ある土曜日の朝早くである。わたしが覚えてるのは曜日だけである。というのも、当時は日にちも、実のところ月もわかっていなかったからである。出航すると、わたしは船尾へと歩いてゆき、ロイド大佐の農園、あるいはそれに類する場所への最後の一瞥となってくれることを望んで、農園に視線を向けた。わたしが大屋敷の農園に対して抱く強い嫌悪は、個人的な苦しみのためではなく、ほかの人たちの日々の苦しみのためであり、遅かれ早かれわたしも、熟達したゴアや大酒飲みで残忍なプラマーのような監督の野蛮な支配にもとに置かれるのが確実であるためであっ

た。この最後の一瞥のあと、後甲板から退いて船首に行き、その日の残りの時間は前方を眺め、近くや後ろにあるものよりも、遠くにあるものに気持ちを向けて過ごした。湾を帆走する船々は非常に興味深い対象であった。広大な湾はわたしの子供っぽい視界においては果てしない海原のように開けており、わたしを驚きと賞賛の念で満たした。

午後遅くになって、州都であるアナポリスに到着したが、上陸できるほどの停泊時間はなかった。それはわたしが初めて見た大きな町であり、ニューイングランドの多くの工場村に比べれば劣っているとはいえ、それを見たときの感情は、旅人たちがローマを初めて見たときに劣らないほど高ぶった。州議事堂の丸屋根は特に堂々としていて、荘厳さにおいて大屋敷の外見に優っていた。大世界がわたしに急速に開けつつあり、わたしは貪欲にその多種多様な教訓を吸収しようとしていた。

わたしがボルチモアに到着したのは日曜の朝であり、ボリー埠頭から遠くないスミス埠頭に上陸した<sup>5</sup>。船にはボルチモアの市場に卸すための羊の大群も乗っており、ルードン・スレーターの丘にあるカーティス氏の屠殺場に羊たちを追いやる手伝いをしたあと、わたしはリッチ——船に属する人手のひとり——にそそくさと案内されて、フェルズポイントのアリシアナ通り沿い、ガーディナーの造船所近くの新しい我が家へと連れてこられた<sup>6</sup>。

わたしの新しい主人と女主人であるヒュー・オールド夫妻はふたりとも家におり、赤い頬をした小さな息子トマスと一緒に玄関で

5 ボリー埠頭とスミス埠頭はいずれもボルチモアの内港に<sup>インナーハーバー</sup>あった埠頭。次文のフェルズポイントのすぐ西に位置する。

わたしを迎い入れてくれた<sup>7</sup>。このトマスの面倒をみるのがわたしの今後の仕事であった。実のところ、老主人がわたしをプレゼントしたのは、夫妻にというよりも「トミーちゃん」にであり、このことが記載された法的な文書や取り決めはなかったといえ、しかるべき時がくれば、わたしはオールド夫妻の愛するきらきらした瞳の少年トミーの法的な所有物になるのだと夫妻が感じていたのは疑いない。わたしはわが女主人の容貌に特に目を奪われた。その顔はこの上なく親切な感情で輝いており、表情がもたらす反射的な影響、そして数多くのちょっとした質問をわたしに問いかける際の優しそうな眼差しはわたしを有頂天にさせ、わたしの将来の道筋を照らしてくれるような気分がした。ルクリースアさんは優しくしたが、新しい女主人である「ソフィさん」のほうが物腰の優しさにおいて優っていた。お母さんからトマスちゃんには愛情たっぷり様子で「こ、こ、ち、ら、が、あ、な、た、の、フ、レ、デ、イ、よ、」、「フレイデイがあなたのお世話をしてくれるからね」と、わたしには「トミーちゃんに優しくしてね」と声がかけられたが、こ

6 カーティス氏については不明。ルードン・スレーターの丘はおそらく、フェルズポイントの北東、現在のブッチャーズ・ヒルからパターソン公園のあたりだと考えられる。フェルズポイントを見下ろすこの丘にはかつて、ルードンスレージャー (Loudenslager) という人物が酒場と屠殺場を構えていた。リッチは『サリー・ロイド号』の船員として働いていた奴隷のひとり。ダグラスがアリシアナ (Aliciana) と呼ぶ通りは現在のアリスアンナ (Alicanna) 通りにあたる。この通りの名称の綴りは十九世紀までは一定していなかった。フェルズポイントでは十八世紀半ば以来、造船業が栄えており、William Gardner (Gardiner) ではなく) はこの港湾地区に造船所を構えていた。

7 ヒュー・オールドの妻ソフィア (一七九七—一八八〇年)、およびその息子トマス (一八二四—一八四八年)。

れはほぼ不要な命令であった。というのも、この可愛らしい少年に對して、わたしはすでに愛情を感じていたからだ。こうしたちょっとした儀式とともに、わたしは新しい我が家の一員となり、自分の仕事に取り掛かったのだが、その地平線にはひとつの雲もなかった。

ここで、ロイド大佐の農園から離れられたことをわが生涯の最も興味深く幸運な出来事のひとつだとわたしは思っていると言つてしまつても構わないであろう。この出来事を人間生活のさまざまな可能性に照らし合わせて考えてみると、奴隷制の過酷さがわたしの身動きを封じてしまう前に——わたしの若い精神が奴隷使役人の鉄の支配に潰されてしまう前に——こうして逃れることができたという単なる巡り合わせがなければ、今現在、自由市民であるかわりに、奴隷制の苦痛に満ちた鎖を身につけていたかもしれないというのも十分にありうることである。しかし、わたしが時に感じるのは、この巡り合わせには偶然以上の知的な何か、運以上の確かな何かがみられるということである。もしわたしが知識の点で進歩をしてきたとすれば——もしわたしが賞賛に値するようなら、なんらかの志を抱いてきた、あるいは抑圧された人々の一員としての義務をなんらかの方法で立派に果たしてきたとすれば、このちょっとした巡り合わせには、わたしの人生をそのように方向づけたという点で相応の重要性があることが認められるべきである。わたしはこの巡り合わせを

「最後の仕上げをするのは神、

人間が粗削りするのだとしても」<sup>8</sup>。

の最初の明らかな現れだとみなしてきた。

農園でわたしだけが、ボルチモアで生活するように送り込まれていたかもしれない少年であつたわけではない。選ばれる可能性のある少年は幅広くいた。老主人が所有するもつと年少の少年、年長の少年、同い年の少年——家働きの者もいれば、野良働きの者もいる——がいたが、この大特権が舞い降りてきたのはわたしにであつた。

この出来事を〈神の御意志〉がわたしのために特別に介入してくれたとみなすのは、迷信的で自己中心的だと思われるかもしれない。だが、そうした考えはわたしの来歴の一部であつて、賢い人から不合理だと言われたり、嘲笑する人から馬鹿げていると言われたりするかもしれないが、この考えを押し殺したり、口にすることをためらつたりするとしたら、わたしが心の底で昔から抱き続け大切にしてきた気持ちを裏切ることになるであろう。奴隷制がわたしをいつまでもその忌まわしい抱擁のうちに留めておくことはできないだろうという、消しがたい確信に似たなにかをわたしが抱き始めたのは、重要な事柄についての最初の記憶にまでさかのぼる。そしてこの確信は、生ける信仰の言葉のように、わが運命の暗黒の試練の数々をくぐりぬけていく際にわたしを強くしてくれた。この善なる精神は神に由来するものであつたので、神に感謝と礼賛を捧げる。

8 『ハムレット』第五幕第二場十一〜十二行目からの引用（ただし、言葉遣いに多少の異同がある）。



## 第十章 ボルチモアでの生活

都市の嫌なところゝ農園への心残りゝ女主人ミス・ソフィアゝその来歴ゝわたしへの彼女の優しさゝ主人ヒュー・オールドゝその気難しさゝ豊かになる感受性ゝわたしにとつての慰安ゝわたしの仕事ゝ親愛なる善良な女主人への奴隷所有の悪影響ゝどうやって彼女がわたしに文字の読み方を教えたかゝどうして彼女が教えるのをやめたかゝ明るい展望に立ちこめる暗雲ゝ奴隷制の真の哲学についての主人オールドの見解ゝ都市の奴隷ゝ農園の奴隷ゝその対比ゝ例外ゝハミルトン氏のふたりの奴隷ヘンリエッタとメアリーゝハミルトン夫人による彼女らへの非道な仕打ちゝ彼女たちの哀れなさゝ奴隷と奴隷所有者の間に権力が介在してはならない

ボルチモアでは、夏の盛りだったため、足元の硬い煉瓦道は暑さで水膨れを引き起こしそうであり、そびえたつ煉瓦造りの建物で全方向を囲まれ、どここの街角でも敵対的な少年たちの一団がわたしを殴ろうと待ち構えていて、一歩歩くとたびに新奇で見慣れない物々がわたしをにらみつけていて、あらゆる方向からどきとさせるような音が耳に入ってくるという状況だったので、つまるところ、ボルチモアのアリシアナ通りの家より、本拠農園の方が住む場所としては望ましいと一時は思ったほどである。ここでは、わたしの田舎者の目と耳は混乱し、途方に暮れてしまったのだが、少年団の方が悩みの種であった。彼らはわたしを追いかけまわし、「東岸野郎」と呼んだので、本当に東岸に戻りたいと思ひそうになった。わたしはある種の精神順化を経なくてはなら

ず、それが終わったときには、かなりうまくやっていけるようになった。幸運なことに、新しい女主人は、玄関で輝きと善意にあふれた表情をして夫と一緒にわたしを迎い入れてくれたときに思えたとおりの人であることがわかった。彼女は生まれつき優れた氣質で、親切で優しく陽気であった。奴隷の権利や感情への傲慢な軽侮や、奴隷を所有する婦人たちを概して特徴づける苛立ちや不機嫌さは、親切なミス・ソフィアのわたしに対しての物腰や立ちふるまいには皆無であった。実のところ、彼女が奴隷所有者であったことはなく――南部では非常にまれなことであるが――生活のために彼女が頼っていたのは、ほぼ完全に自分自身の勤勉さだけであった。この事実のために、彼女が生まれつきの心の善良さを見事に保つことができたのは疑いない。というのも、奴隷制は聖人を罪人に、天使を悪魔に変えうるからである。「ミス・ソフィア」――ヒュー・オールド夫人のことをわたしはそう呼んでいたのだが――に対してどのようふるまったらいいのか、わたしにはほとんどわからなかった。わたしは農園では豚として扱われていたが、ここでは子供として扱われた。彼女に対しては、かつてトマス・オールド夫人に対して接したように接することさえできなかった。わたしを蔑む高慢さ、わたしをはねつける冷たさ、わたしを恐怖させる憎しみもないのに、うつむき加減に息を殺して話すことなどできるだろうか。そのため、まもなくわたしは彼女のことを、奴隷を所有する女主人というよりも、母親に近いなにかとしてみなすようになった。傲慢な奴隷所有者からはたいてい歓迎される奴隷のへりくだった追従は、この親切な女性には理解されず、望まれなかった。彼女は、一部の奴隷を所有する



婦人たちのように、奴隷が顔を直視することを無礼だと思うどころか、「顔を上げなさい、怖がらなくていいのよ、わたしはあなたに対して優しさと善意しかもっていないのがわかるでしょ」といつも言っているようにみえた。ロイド大佐のスループ船の乗組員たちは、わたしの新しい女主人に小包や手紙を持っていくことを素晴らしい特権だと考えていた。というのも、ここに来れば彼らはいつでもかならず、たいへんに親切で気持ちよい応対を受けるからである。トマスちゃんが彼女の息子、最も心から愛すべき子供だとしたら、彼女はその愛情において、わたしのことをトマスの異父兄弟のようななにかに、少なくとも一時的にはしてくれた。親愛なるトミーが母親の膝の上の場所に上がらせてもらえるのだとしたら、「フレイデー」はこの母親の横の場所を拝借していた。彼はまたこの女性が、母親はいないけれども、友人がいないわけではないことを彼に信じさせるために、優しい手で愛撫してくれることにも事欠かなかった。オールド夫人は優しい心の持ち主だけでなく、顕著に敬虔であり、集会でのお祈りにはよく参加し、ひとりのときには聖書を読み、讃美歌を歌うことに熱心であった。ヒュー・オールド氏はまったく違った性格であった。彼は宗教についてはほとんど気かけず、妻よりも世の中を知っており、もっと世俗的であった。彼はこの造船業の街で造船業者として成功することで、立派な人物——世間一般的にみて——となり、うまくやっていくことを目指しているのは疑いなかった。これが彼の野心であり、彼の心はそれでいっぱいだった。彼にとつてわたしは、善良なオールド夫人にとっての場合と比較すれば、当然ながらほとんど無価値であって、彼が時にくれたように

わたしに微笑みかけてくれるときでも、その笑みは彼の愛らしい妻から借りてきたものであり、あらゆる借りものの光と同様に一時的で、それが由来する源泉がいなくなってしまうと消滅してしまふのだった。主人ヒューは非常に気難しい人物で人を寄せ付けないような風采をしていると形容せざるをえない一方で、彼に対して公正を期するために言っておけば、メリーランドでの残酷さの観念からすれば、彼はわたしに対して一度たりも残酷であったことはなかった。わたしがこの家で過ごした最初の一、二年間、彼はわたしをほぼ独占的に妻の管理に任せていた。彼女はわたしにとって立法者であった。彼女のような柔らかい手に委ねられ、農園で見られるような残虐行為もなかったので、わたしは肉体的にも精神的にもよい扱いと悪い扱いに対してより敏感となった。そして、かつてケイティおばさんの手で殴られて苦しんだ以上に、女主人のしかめ面にひよつとするとより多くの苦しみを感じた。わたしは老主人の台所の冷たく湿った床のかわりに、カーペットの上にいた。冬のトウモロコシ袋のかわりに、カバーできちんと覆われた上等な藁のベッドが自分のものとなった。朝の粗末なトウモロコシ粉のかわりに、上質なパンがあり、時にはトウモロコシ粥もついていた。膝まで届くみすばらしい麻くず地のシャツのかわりに、上等で清潔な服をもっていた。わたしは本当によい暮らしをしていた。仕事はいえば、お遣いをすることとトミーの面倒をみること、彼が馬車の進む先に行かないようにすること、それに全般的に危険な目に遭わせないようにすることであった。トミーとわたしと彼の母親はしばしのあいだ順調にうまくやっていた。しばしのあいだというのは、責任を問われない権

力につきものの毒と、奴隷制の慣習が当然もたらす影響が、わたしの素晴らしい女主人の優しく愛情深い気質に対して相応の作用を与えるまでにたいして時間がかからなかったからである。当初、オールド夫人はわたしを単に他の子供と同様の子供だとみなしており、財産だとはみていなかった。この後者の考えは慣習によるものであった。最初の考えは自然で自発的であった。彼女のようにより高貴な性格がすぐさま完全にねじまげられることはありえず、その気質の生来の優しさが不機嫌な手厳しさに変わるには数年がかかった。しかし、最悪の状態にあっても、わたしが彼女と同居していた最初の七年間には、かつての優しさが時として戻ってくることもあった。

女主人が聖書を読むのを頻繁に聞いているうちに——彼女は夫が不在のときにはしばしば声に出して読んでいたので——この読書という謎についてわたしの好奇心はすぐにかきたてられ、学びたいという願望が芽生えた。目の前にいる優しい女主人に対してなんの恐れも抱いていなかった（彼女はその当時、恐れる理由をまったく与えなかった）、わたしは彼女に文字の読みを教えてくれるよう率直に頼んだ。すると、この親愛なる女性はためらうことなく教えることに着手し、わたしはこの助けによって、かなり短期間のうちにアルファベットを習得し、三、四字からなる単語を綴ることができるようになった。女主人は、あたかもわたしが彼女自身の子供であるかのように、わたしの進歩をほとんど誇りに思ってくれているようにみえた。そして、彼女は夫も同じくらい喜ぶだろうと考えて、自分がわたしのためにやっていることを隠そうとはしなかった。彼女は実際、自分の生徒の素質や、

わたしへの教育を最後までやり抜こうという意気込みや、少なくとも聖書の読み方をわたしに教えるのが義務であると感じていることについて、いかにも嬉しそうに夫に話したのである。ここに、わたしのボルチモアでの展望に垂れ込める最初の暗雲、土砂降りの雨と凍えるような突風の先触れが出現したのだ。

主人ヒューは妻の単純さに驚き、奴隷制の真の哲学、そして奴隷を管理するにあたって主人と女主人が守らなければならない特別な規則について、おそらくはじめて彼女に説明した。オールド氏は彼女が教育を続けることを即座に禁止した。まず彼が言ったのは、文字の読み書きを教えるのはそれ自体違法であって、また危険でもあり、災いしかもたらさないだろうということである。

さらに、彼自身の言葉を借りれば、「黒んぼに一インチでも許せば、やつらは一エル持つていくもんだ」と言った<sup>10</sup>。「やつらは主人の意図だけわかって、それに従っていればいいんだ。」「学がつくと世界最高の黒んぼだってだめになっちゃう。」「あの黒んぼ（わたしのこと）に聖書の読み方を教えたりしたら、やつをおとなしくさせておくことはできなくなるぞ。」「やつを完全に奴隷の仕事に向かなくしてしまうぞ。」「やつにとっても、学なんてついてもいいことないぞ、おそらく相当な害はあるだろうが——あいつを不満不幸にしちまうからな。」「あいつに読み方を教えたら、文字の書き方も知りたがるだろうよ、それでそれが達成された

9 実際には、メリーランド州には他の多くの奴隷州とは違って、奴隷の読み書きを禁じる法律はなかった。

10 イギリスの古い格言の言い換え。エルはイギリスで昔使用されていた長さの単位で、四十五インチ。

ら、まふと逃亡するだろうさ。」奴隷調教の眞の哲学についての、主人ヒューの賢明きわまりない説明の趣旨はこのようなものであつて、主人と奴隷の關係の本質およびそこで必要とされるものを彼は非常に明確に理解していたことを告白しなくてはならない。彼の話は、わたしが聞くことを運命づけられていた最初の毅然たる反奴隷制主義の講演であつた。オールド夫人は明らかに彼の説明に説得力を感じており、従順な妻らしく、やり方を夫によつて示された指針に合わせてゐるようになった。彼の言葉のわたしへの影響はわずかでも一時的でもなかつた。彼の鉄のごとき一文一文——冷たく厳格な——はわたしの心に深く突き刺さり、感情をある種の反乱へと掻き立てただけでなく、煮えたぎる一連の重大な思考をわたしのうちに呼び起こした。それは新たな特別な啓示であり、わたしの幼い理解力ではがんばつても理解できなかった困難な謎を消し去つた。謎とはつまり、黒人をいつまでも隷属させておく白人の力のことである。「なるほど、知識は子供を奴隷に向かなくさせるのか」とわたしは考えた。わたしは本能的にこの命題に同意し、この瞬間から奴隷制から自由に至る直通の道筋を理解したのだ。これこそまさにわたしが必要としていたものであつたが、わたしはそれをまったく期待していなかつた時と場所を得たのだつた。親切な女主人からの助けを失うことを考えるど落胆したが、これほどまでに即座に得られた情報は、そうした点で被つた損失をある程度補つてくれた。オールド氏は賢かつたとはいへ、わたしの理解力を明らかに過小評価しており、彼が妻に述べた見事な教訓をわたしがどのように活用することができのかについてほとんどわかつていなかった。彼はわたしを奴隷に

しておきたかつたが、わたしはロイド大佐の本拠農園でそれには従わないことをすでに決めていた。彼が最も愛するものを、わたしは最も憎んだのであつて、わたしを無知なままにさせておこうと彼が示した強い決意は、知識を求めようというわたしの決心をますます強めるだけであつた。したがつて、文字の読みを習うにあつて、友好的な女主人の親切な助けとまさに同じくらい、主人の反対が寄与していなかつたとはわたしには思えない。女主人がいなければ無知のまま大人になっていたと思いつつ、このひとに加えて、もうひとりによつてもたらされた利益についても感謝している。

ボルチモアに住んでまもなく、奴隷の扱い方全般について、わたしが生まれ育つたあの隔絶して辺鄙な場所で見撃した扱い方とは顕著な違いがあることに気づいた。ロイド大佐の農園の奴隷を比較して、ボルチモアにおける都市の奴隷はほぼ自由市民である。彼らは食べ物や衣服においてはるかによい待遇を受けており、風采に惨めつたらしいところが少なく、鞭で追い回されている農園の奴隷にはまったく無縁な特権を享受している。奴隷制が密集した人口を嫌うのは、そこでは非奴隷所有者が多数派となるためである。そうした場所では一般的な節度の感覚が浸透せざるをえないために、農園ではほぼ公然と犯されるあの非道な残虐行為の発生と、あの名もなく暗闇に沈んだ犯罪の抑制と防止につながっている。痛めつけられた奴隷の叫び声によつて近隣の非奴隷所有者たちの人間性に衝撃を与える者は、落ちぶれ果てた奴隷所有者であり、残忍な主人という汚名をすすんで招こうとする者は都市にはほとんどいない。ボルチモアでは、自分の奴隷を飢えさ



せているという評判のある人物以上に、黒人にとつてと同じくらい白人にとつても唾棄すべき存在はないことをわたしは知った。奴隷を働かせ、必要があれば鞭で打つことは構わないが、飢えさせてはならないのだ。ただし、これには痛ましい例外もいくつかある。ボルチモアのほとんどの奴隷所有者が自分の奴隷に十分な食べ物と衣服を与えているのは確かであるが、田舎で行われているような非道行為をこの都市で続けている者もいる。

この種の事例は、わたしたちの家の真向かいに住んでいたハミルトンという名前の家族にみられる。ハミルトン夫人は二名の奴隷を所有していた。その名前はヘンリエッタとメアリーであった。ふたりはずっと屋内働きの奴隷であった。ひとりとは二十二歳ほどで、もうひとりとは十四歳あたりであった。ふたりとも生まれつき体が弱く、彼女たちが受けていた扱いは、馬ほどの肉体を衰弱させるのに十分なくらいであった。わたしがそれまでに見た、元気がなく痩せ衰えてずたばらの生き物すべてのなかで、このふたりは——洗練された教会通いのキリスト教徒の都市であるボルチモアにありながら——最もひどいありさまであった。悲しみで心の底から打ちひしがれることなく、ヘンリエッタとメアリーを眺めることのできる者の心は、石でできているにちがいない。特にメアリーは見るも痛ましい人物であった。彼女の頭と首と肩は文字どおり粉々に切り刻まれていた。わたしがしばしば彼女の頭を触ると、それは彼女の無慈悲な女主人の鞭打ちのためにできた化膿した傷口でほとんど覆われていた。彼女の主人が彼女を鞭打っていたかはわからないが、ハミルトン夫人によるぞつとするほどの残忍な鞭打ちはしばしば目撃していた。そして、この女性

の行動にさらに深い陰影を与えるのは、人間性と節度に反する衝動的な行為のほとんど最中にありながら、彼女はその声の優しさと見かけ上の敬虔さによって人々を魅了していたという事実である。彼女は、部屋の中付近の大きな揺り椅子に座って、別の箇所で説明したような重たい牛革の鞭を手を持っていたのだが、ふたりの女の子が日中にこの椅子のそばを通り過ぎるとき、そのむきだしの腕やその肩にこの牛革鞭での一撃を加えないことはめったになかったと言つても、真実から外れた話をしていることにはならない。彼女たちが女主人の横を通り過ぎるとき、女主人は「もつと早く動け、この黒い雌犬め！」と言いながら、その鞭を振りかざして彼女たちに一打を加え、「これをくらえ、この黒雌犬！」と言つてもう一打ち、続けて「もつと早く動かなかつたら、もつとくらわすよ！」と言うのだった。それから、この婦人は、あたかもその公正な魂が天国の聖なる領域を請い求めているかのように、彼女の甘美な讚美歌を歌いつづけるのであった。

これら哀れな奴隷少女たちは、非道な鞭打ちを受けていたのに加えて——それだけでも人間の心を打ちひしぐのに十分であるが——実にほぼ半分飢え死にの状態にさせられていた。彼女たちは、聖歌を歌うハミルトン夫人ほど卑劣でけちではない近隣の人たちの台所でありつくとき以外は、まともな食事というものをほとんど知らなかった。わたしは、哀れなメアリーが街角で豚たちとくず肉を争っているのを見たことがある。この哀れな少女はあまりに困窮し虐げられ、粉々になるまで痛めつけられつつかれ回されていたので、あたりの少年たちからは、彼女の首や頭や肩の傷跡やあざに由来する名前である「つつかれ痕女」という名前だ



けで知られていた。

ボルチモアにおけるこのような奴隷制の実態にとって多少の安堵の種となるように言っておけば——これは純然たる真実にすぎないのだが——ハミルトン夫人の奴隷に対する扱いは不名誉でけしからぬものだとして一般に非難されていた。だが、こう述べる一方で、自分の奴隷を粉々になるまで痛めつけるハミルトン夫人の権利に干渉しようという試みがなされれば、彼女の残忍さを咎めるまさに同じ人たちが、そうした試みを非難し即座に罰していただろうことも忘れてはならない。奴隷と奴隷所有者のあいだには、後者の力を抑制し、前者の弱さを守ってくれるような力は介在してはならないのだ。そして、酒浸りの責任が教示や模範もしくは無関心によって飲酒の体制を支持する人々に帰せられるべきであるのと同じように、ハミルトン夫人の残忍さの責任は、奴隷制の体制の支持者たちに同じくらい正当に帰せられるべきなのである。